

平成28年度 熊本地震

前震:4月14日 21時26分 マグニチュード6.5(震度7)

本震:4月16日 01時25分 マグニチュード7.3(震度7)

赤十字飛行隊 活動記録



この人に聞く

熊本地震

大規模災害時に自家用機で、空撮や物資・人員の輸送などに当たる民間ボランティア「赤十字飛行隊」。

1985年の日航機墜落事故をはじめ、阪神大震災や東日本大震災でも救援活動に加わった。熊本地震での活動や、浮き彫りになった課題を熊本支隊の新永隆一（53）に聞いた。

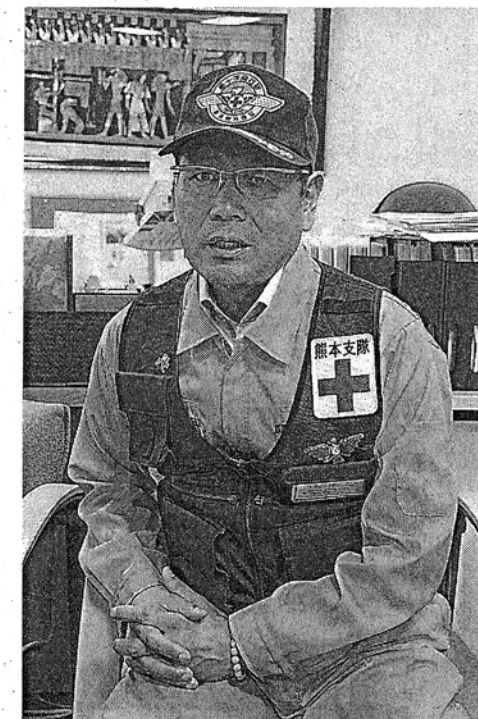
「阪神大震災の時は、粉ミルク300人分を調達して熊本から運んだ。東日本大震災の時は、現地の医者の食料が足りないと言われ、岡山支隊と協力して食料を運んだ」

赤十字飛行隊とはどういう組織ですか。

「日本赤十字社直轄の組織で、隊員は自家用機のオーナー。全国に37支隊、約100人の隊員がいる。熊本支隊は現在6人。2014年5月には県と災害協定を結んだ。大規模災害時の救援や復旧などに役立っている組織です」

赤十字飛行隊熊本支隊長 新永 隆一さん

空からの民間支援 課題は？



◇しんなが・りゅういち
1963年、熊本市北区植木町生まれ。95年に赤十字飛行隊に入隊し、2011年に4代目熊本支隊長に就任。現在は赤十字飛行隊本部の副隊長も務める。「九建」代表取締役。

食料を手配してほしいと連絡があった。岡山支隊と長野支隊が水460リットル、バナナ100個、パン500個を調達し、いち早く届けた。地上で活動するグラウンドチームも炊き出しや給水活動をした」

「スムーズに空輸できなかったか。」

「熊本空港が自衛隊や警察、消防の特定組織しか使えなくなり、物資を運んでくも着陸できない状態が続いた。県や国に何度も働き掛け、何とか着陸許可をもらったが、その手続きに相当の時間を要した。阪神大震災や東日本大震災の時も同じで、事態は改善されていなかった」

「今後どんな対応が求められるか。」

「必要などころにいち早く民間ボランティアや物資が届くような環境づくりが必要。どういった民間ボランティアがいるのか、行政が日ごろから把握し、ネットワークをつくっておけば、災害時にもっと有効に活用できるはずだ」

「随時掲載」

着陸許可手続き もっと早く

熊本地震

あの時 何が

2016.10.24

南阿蘇からSOS 大学に千人孤立

赤十字飛行隊編①

巨大な揺れが県内を襲った。4月14日夜、マグニチュード(M)6.5の前震に始まった熊本地震。16日未明にはM7.3の本震が起こり、古里の景色や生活を一変させた。混乱と恐怖の中で何が起き、人々はどう行動したのか。被災地の「あの時」を記していく。

4月17日午後2時すぎ、赤十字飛行隊のヘリコプターは熊本空港を離陸して間もなく、南阿蘇村上空に差しかかった。「これは！」。機上で熊本支隊長、新永隆一（53）は言葉を失った。大規模な土砂崩れが山肌をえぐり、全長約200メートルの阿蘇大橋が跡形もない。地面はあちこちで波打ち、地割れが走る。新緑に連なる別荘地では、何軒もの家が土砂に流され、半分ひっくり返った建物もあった。「思っていた以上にひどい」。眼下の光景に身を硬くした。

搭乗するヘリは、ほぼ孤立状態にあった南阿蘇村河陽の東海大阿蘇キャンパスを目指していた。近くのアパート街では16日の本震で、学生3人が犠牲に。学



阿蘇大橋が崩落するなど大きな被害が出た南阿蘇村の土砂崩れ現場。手前が黒川地区＝5月4日（大倉尚隆）

内には避難した千人近い学生や周辺住民が、寒さと空腹に耐えていた。本震から約36時間。岡山県で調達した水とバナナ、パンを満載したヘリは急いでいた。

赤十字飛行隊は日本赤十字社が直轄し、自家用機を所有する民間パイロットらで組織するボランティア団体だ。熊本支隊など全国37支隊で構成。大規模災害時には物資や人員の輸送、被災状況の空撮などを担う。飛行隊と阿蘇キャンパスをピンポイントでつないだ。1995年の阪神大震災、2011年の東日本大震災でも食料や医薬品などの輸送で活躍した。

「大学に千人が避難している。水も食料も十分ない。何かならないだろうか」

電話の主は、村内で観光農園を営む熊本支隊メンバー、木之内均（55）。パイロット資格を持つ木之内は2年前、赤十字飛行隊に入隊した。だが、自分が救助を求めるときは「夢にも思っていなかった」。

木之内が住む黒川地区は、地震を引き起こした布田川断層帯のほぼ真上。土砂崩れが起きた立野地区と並び、村内で特に大きな被害が出た地区だ。対岸の国道57号と地区内を結ぶ阿蘇大橋の崩落に加え、村中心部とつながる国道325号など主要ルートも軒並み寸断。地区には徒歩で入るしかなかった。

広い人脈を持ち、県教育委員も務めた木之内。地震直後から携帯電話には、情報を求める県幹部や知人からの連絡がひっきりなしだった。「阿蘇大橋が落ちたって、本気でびっくり」。電波状態が悪く、ほとんどはすぐに途切れたが、受話器の向こうから緊張感が伝わる。自分たちが大変な状況に置かれていると十分理解できた。

「孤立状況は、すぐには解消できんだろう。最低でも3日間は自力で頑張るしかない」。木之内は覚悟を決めた。

そして、SOSのメッセージを送ったのが親交の深い県総務部長（当時）の木村敏（42）らと、赤十字飛行隊だった。

（毛利聖一、浪床敬子）

「文中敬称略」

学生アパート街倒壊「救助のへりを」

赤十字飛行隊編②

熊本地震

2

あの時 何が

2016.10.25

「ゴー」「ドーン」。4月16日午前1時25分、木之内農園会長の木之内均(55)は南阿蘇村黒川地区の自宅で、聞いたことのない地鳴りに身構えた。突き上げる衝撃と長い揺れ。前震から28時間後に起きたマグニチュード7・3の激震。熊本地震の本震だった。

「何かとてつもないことが起きている」。ガラガラと何かが崩れ落ちるような不気味な音も。それが近くに架かる阿蘇大橋を崩壊させた、大規模な土砂崩れの音と知ったのは、夜明けだった。

木之内は、九州東海大(現東海大)農学部1期生。卒業後も村内で観光農園を営み、教授として後輩に農業経営を教える。県教育委員長も務め、住民からも慕われる存在だ。

本震直後、家族の無事を確かめると、学生たちが住むアパート街に走

りだした。亀裂だらけの道に何度もつまづきそうになりながら、地面に転がるプロパンガスの栓を閉めて回った。泣きじゃくる女子学生の横で懐中電灯の光を当てると、ひしゃげたアパートが浮かび上がった。

「すぐにバールを持ってこい」180センチ近い長身の木之内は、男子学生や住民と一緒に閉じ込められた学生の救出に当たった。「大丈夫か。助けてやるけんね」。声を掛けるが、つぶれた1階部分から助け出すのは容易ではない。約2時間がたった頃、ようやく消防のレスキュー隊が到着した。

東の空が明るくなり始めていた。あらためて見回すと、「学生村」と呼ばれてきたアパート街は無残な姿に変わり果てていた。消防士らによる懸命の救出作業が続いた。けがをした学生や住民は、近くの旧長陽西部小の校庭に運んだ。

「けが人が多数いる。救出のヘリコプターを降ろしてほしい。今なら着陸OKだ」

木之内は赤十字飛行隊の隊員であり、パイロット資格を持つ。県庁の



けが人が運び込まれた旧長陽西部小の校庭で、活動を手伝う木之内均さん(中央)
4月16日、南阿蘇村河陽(堀江利雅)

災害対策本部に詰めていた県総務部長(当時)、木村敬(42)に状況を知らせた。「分かりました。二次被害に気を付けて」。木村は早口で応じた。

ただ、校庭のすぐ上には、高圧電線が通っており、着陸には、進入方向など細心の注意が必要だった。既に上空には報道を含むヘリが飛び交っていた。

「ごやんいっばい飛んどったら危なかるうが!」。爆音をどろかせる多数のヘリに怒りを覚えた、木之内はドクターヘリの到着を待った。校庭にはけが人だけでなく、住民や学生が続々と集まり始めていた。

(毛利聖一)
文中敬称略

天候悪化予報「雨ざらしで一夜なんて」

赤十字飛行隊編③

熊本地震

3

あの時 何が

2016.10.26

南阿蘇村黒川地区の高台に立つ旧長陽西部小。4年前に廃校となったが、100年超の歴史を刻んできた。村指定の避難場所でもある。

しかし、熊本地震の本震で体育館横の土手は崩壊。校舎も窓が粉々に割れた。安全確認はできず、とても入れる状態ではなかった。

4月16日午前7時すぎ。家をなくした学生や住民らが、校庭に集まってきた。手を握り合うお年寄り、毛布で体を覆い、しゃがみ込む大学生。各県のマークを記したドクターヘリが次々と降り、けが人を緊急搬送した。

その朝、気温は10度を下回り、吐く息は白かった。住民らは校庭の隅で身を寄せ合った。「朝までの時間がひたすら長かった」。東海大農学部4年の原田健汰(22)は、恐怖の夜を振り返る。

そのころ村消防団副団長、今村輝宏(44)は、黒川地区の南端にある東急ゴルフ場を走っていた。早朝、役場内の災害対策本部に入り、「壊滅的被害、行方不明者多数」との情報を得たからだ。はやる気持ちを抑え、黒川へと向かった。

「大丈夫だったや」。到着すると、団長の中尾博昭(54)が待っていた。中尾の自宅は、対岸の立野地区。地震後、阿蘇大橋の崩落で本部入りを諦め、黒川に入っていた。4年前の九州北部豪雨でも副団長として犠牲者の捜索に当たった。

「戦地のよう」に破壊された光景は、災害経験のある2人にしてもはるかに想像を超えていた。活動拠点となる消防車を置く建物も崩れていて、

「これは(犠牲者が)3ケタいくかもしれない」。安否情報が入り乱れる中、今村の脳裏には最悪のケースが浮かんだ。

黒川地区の区長、竹原満博(55)も校庭で住民の安否確認や連絡に追われていた。



旧長陽西部小学校の校庭に避難してきた住民ら＝4月16日午前6時すぎ、南阿蘇村河陽(堀江利雅)

0人。竹原もアパートを営み、学生は子どものような存在だ。日焼けした、がっしりとした竹原だが、茫然とする学生を前に「守らんといかん。自らを鼓舞し続けた。そんな時だった。ドン。震度6の大きな余震が襲った。「ヒャー」。

校庭のあちこちから悲鳴が上がる。さらに、竹原ら地区役員を不安にさせるニュースが届いた。「今夜から風雨が強まる恐れがある」。被災地に追い打ちをかけるような、天候悪化を知らせる予報だった。

「千人もの人たちが雨ざらしで一夜を過ごすなんて、でん」。誰からもなく、声が上がった。

(毛利聖一)
文中敬称略

避難所の大移動「学生無事に帰す」

熊本地震

4

あの時 何が

2016.10.27

「本当に大丈夫だろうか」。熊本地震で倒壊した学生アパート街での救出活動が一段落した4月16日の昼前、南阿蘇村黒川地区の東海大阿蘇キャンパスを預かる農学部長、荒木朋洋(61)は決断を迫られていた。夜からの天候悪化の予報を受け、県警から「避難住民を受け入れてもらえないか」と打診を受けていたのだ。

東海大に籍を置いて約30年の荒木は、物腰の柔らかな研究者。この日は作業着姿で、阿蘇市の自宅からいち早く現地入りした。キャンパスには数学部の課長、村山敏久(64)らも駆け付け、学生の安否確認に追われた。

学生3人が犠牲となる中、本学との連絡は通信環境の悪化で途絶状態。荒木は警察官の立ち会いでキャンパス内を再度確認し、体育館の使

用を許可した。

「800人の若者を預かっている。親御さんの元へ無事に帰すことしか頭になかった」。村山は、当時の緊迫した様子を語る。

旧長陽西部小などに避難していた約千人の大移動が始まった。大学まで近道を通れば徒歩で10分足らず。しかし、高齢者や子どもが多く、しかもショック状態にあった。

「頑張つて」。住民らは声を掛け合った。女子学生はお年寄りの手を取り、男子学生は荷物を担いで30分以上かけて歩いた。

阿蘇キャンパスの体育館は、壁の一部が崩れ落ち、安全とは言いがけない状態だった。そこに千人近くが雑魚寝する過密ぶり。荒木らが特に懸念したのが食料だ。指定避難所ではないため、学内の備蓄は水と数百個のようかんだけだった。

「避難者の一部でも別の場所に移動できませんか」。派遣された自衛隊の指揮を受け、荒木らは村や区長らと相談。学生のうち約1000人を、その日のうちに高森町へ徒歩などで避難させることを決定。加えて、キャンパス内で寮生活を送る野球部員



地震発生後、旧長陽西部小から東海大阿蘇キャンパスに避難する住民や学生＝4月16日午前、南阿蘇村河陽（木之内さん提供）

赤十字飛行隊編④

約40人は、農場のビニールハウスに移すことにした。

「学生には申し訳なかったが、よく協力してくれた」と荒木。野球部員らは、雨漏りのするハウスで寒さに耐え、一夜を明かした。

住民が避難を終えた直すぎ、木之内農園会長の木之内均(55)の携帯電話が鳴った。県総務部長(当時)の木村敏(42)からだ。 「500食分は確保できた。自衛隊に運んでもらいます」

ホッとした木之内だったが、「十分ではないかもしれない」。頼みの綱である赤十字飛行隊熊本支隊長、新永隆一(53)の電話番号を押した。

(毛利聖一)

＝文中敬称略

熊本に飛んでくれ 全国支隊に緊急依頼

赤十字飛行隊編⑤

熊本地震

5

あの時 何が

2016.10.28

「動ける支隊には待機をお願いしている。水と食料を運んでもらうよう手配する。何とか頑張ってくれ」

4月16日午後2時、南阿蘇村の東海大阿蘇キャンパスに避難した赤十字飛行隊員、木之内均(55)からのSOSに、熊本支隊長の新永隆一(53)は大きな声で返した。

全国37支隊の赤十字飛行隊で副隊長も務める新永。熊本地震の前震直後から、もう一人の副隊長、和歌山支隊の田井秀治(62)と連絡を取り活動を開始していた。併せて16日は自身が経営する会社の貯蔵タンクから、要請があった日赤県支部へ緊急車両用ガソリン約200リットルを陸路で運ぶ作業にも当たっていた。

飛行隊は災害時に物資輸送などに協力。熊本支隊は2014年5月、被災地の被害状況を把握するための空撮に協力する防災協定を県と結ん

でいた。

今回は前震の翌15日、大阪支隊のヘリコプターが益城町の被害状況を空撮。新永は撮影係として乗り込んだ。空撮には、低速での低空飛行やホバリング(空中停止)ができるヘリが適しているが、県内には所有する隊員がいないためだ。

「食料と水を確認して、南阿蘇村まで空輸してくれる隊員はいないだろうか」

木之内から支援要請を受けた新永は、田井に応援機の手配と、大量の水と食料の確保を依頼。田井の呼び掛けに軽小型機を持つ岡山支隊の寺岡伸二(48)と、ヘリを所有する長野支隊の白澤政仁(57)が手を挙げた。

「報道で熊本の状況を知って、準備を始めていた」。こう振り返る田井は元警察官。退職後、関西で警備など危機管理をサポートする会社を経営する。「前震直後から次々と情報が入り、九州に最も近い私が調整に当たった。3日間、ほとんど眠れなかったよ」

新永は、熊本市北区で建設会社の代表を務める。隊員はいずれも仕事の傍ら活動するボランティアだ。そ



前震直後の益城町の空撮に向かう赤十字飛行隊大阪支隊のヘリコプターの機内
＝4月15日（赤十字飛行隊熊本支隊提供）

れでもスムーズな連携と迅速な対応ができた背景には、積み重ねてきた経験があった。

阪神大震災や東日本大震災では、発生直後の被災地に医薬品や輸血用血液、粉ミルクなどを空輸。新永自身、炎上する神戸市に入り、東北では海岸に流れ着いた無数の遺体も目にしてきた。

長野支隊のヘリと岡山支隊の軽飛行機は16日のうちに、岡山市の岡南飛行場で合流。物資輸送の準備に入

った。ただ、熊本へ向かうにはハードルがあった。本震後、民間機の使用が制限された熊本空港への着陸許可を得る必要があった。

(浪床敬子)

＝文中敬称略

離発着に許可必要「そんな場合じゃない」

赤十字飛行隊編⑥

熊本地震

6

あの時 何が

2016.10.29

「急ぎ大量の食料と水がいる。時間が無い。可能な限り、分けてもらえませんか」

4月16日夕、赤十字飛行隊岡山支隊の寺岡伸二(48)は、長野県松本市から駆け付けた長野支隊の白澤政仁(57)と岡山市内を駆け回っていた。熊本への緊急物資の調達に当たっていたのだ。

南阿蘇村黒川地区の東海大阿蘇キャンパスで、孤立状態となっていたのは約千人。熊本地震の本震から既に半日以上が過ぎていた。

大型店でありつた飲料水を出してもいい、知り合いの青果市場に「明朝までにバナナを大量に仕入れてほしい」と依頼。白澤は岡山市の業者に焼きたてパンを頼み込んだ。水460リットルとバナナ100キログラム、500個の確保にめどが立った。あとは正式な輸送要請を待つばかり

だったが、実はこの時、熊本へ飛び立てる環境は整っていなかった。民間機が離発着するには、使用届とフライト計画を空港管理者に提出し、その許可を得る必要がある。しかし本震後の熊本空港は自衛隊や県警、消防など公的機関による救助活動や物資輸送を優先するため、民間機の乗り入れを中断する非常事態態勢を取っていた。

「そんなこと言っている場合じゃない。孤立した千人が到着を待っている。17日の朝いちで出発します！」。一刻も早く物資を届けたい寺岡は、熊本支隊長の新永隆一(53)に電話で訴えた。

ただ当時、熊本の空は自衛隊や警察、報道など多数のヘリや飛行機が飛び交っていた。「事故を起こしては元も子もない」。熊本空港の使用許可を取り付けるため、新永は電話先の県幹部に飛行隊の必要性を説明した。

「飛行隊は県と災害協定を結んでいる。物資輸送は、県から飛行隊への要請ということで、空港事務所に働き掛けてほしい」
新永が手続きに奔走しているこ



岡山県で調達し、熊本空港まで空輸されたバナナや飲用水＝4月17日午後（赤十字飛行隊熊本支隊提供）

ろ、阿蘇キャンパスには急ごしらえのヘリポートが出来上がった。先に自衛隊のヘリコプターを受け入れるため、校舎横のグラウンドに石灰で「H」と大きく記された。中心となつたのは東海大教授でもある熊本支隊の木之内均(55)。いつ到着しても支援物資を受け入れられるよう、待機した。

しかし、数時間たっても機影は見えない。午後7時ごろには予報通り、風雨が強まってきた。「天候に強い自衛隊機とはいえ、この風で着陸できるのか」

木之内の悪い予感的中した。上空に飛び交うヘリの音は、やがて完全に聞こえなくなった。(毛利聖一、浪床敬子)

＝文中敬称略

住民、学生が助け合い「つないだ命守らんと」

赤十字飛行隊編⑦

熊本地震

7

あの時 何が

2016.10.30

宵の雨が、体育館をたたきつけていた。

4月16日夜。悪天候で自衛隊のヘリコプターが引き返したころ、南阿蘇村黒川地区の東海大阿蘇キャンパスでは、学内の備蓄食料だったようかんが配られていた。ただ、熊本地震で避難した千人近くが分け合うには十分でなく、1人に数切れ。発電機用ガソリンも1缶のみで、2台のライトがかすかに明かりをともしていた。

「あすになれば、物資は届くだろうか」。大学のワゴン車で農学部長の荒木朋洋(61)は、手をこすりながら寒さに耐えていた。

深夜、村の若手職員数人が歩いてやってきた。膨れ上がったリュックの中身は100個ほどのパン。「これじゃ足りないでしょうけど」。本

震後、ようかん以外で初めて口にする貴重な食料だった。一部を保存し、全員で分け合った。

厳しい環境で救いとなったのは、住民と学生の助け合いだ。居合わせたボランティア経験者の助言で、大学関係者や区長ら総務班の下に衛生看護、医療、物資、食事、ペット対応といった班を組織。避難者の名簿も作った。フロアは地域や学生アパートごとに分け、すぐに逃げられるよう動線も確保した。

衛生看護班長は、村社会福祉協議会のベテラン介護福祉士市原真由美(46)。明るく世話が行き届き、住民から頼りにされている。地震後は全壊した自宅から、心拍数などの測定器や血圧計を持ち出していった。友人の看護師と一緒に、高齢者や体調の悪そうな人に声を掛けて回った。

「フラフラする」「気分が悪い」「動悸がする」。治療はできないが、できる限りアドバイスした。「うわあ」。何度も襲ってくる余震に身震いしながらも、市原は自らに言い聞かせた。「つないだ命を守らんと。絶対死なせるもんか」

災害派遣医療チーム(DMAT)



避難後、住民や学生らで混み合う東海大阿蘇キャンパスの体育館。この後、組織的な運営が行われた
＝4月16日午後2時半ごろ（大倉尚隆）

の到着に備え、一人一人が日ごろ飲んでいる薬のリストも作りあげた。学生たちも役割をこなした。物資班長の農学部4年、原田健汰(22)は日ごろから兄貴分的な存在。「不思議と落ち着いて対応できた」。避難者が体を拭けるよう、限られた数の備蓄タオルを懸命に切り分けた。17日早朝、雨は上がった。DMATを待つ市原らは、ロッカーを横倒しにして簡易ベッドをつくり、診療コーナーを整えた。

ただ、DMATも食料も到着の気配はない。夜は交代で休憩をとったが、一睡もできなかった。くたくたの体に空腹がこたえた。

(毛利聖一)
＝文中敬称略

物資輸送に航空法の壁「非常手段」で突破

赤十字飛行隊編⑧

熊本地震

8

あの時 何が

2016.10.31

4月17日早朝。県交通政策課政策監の内田清之(52)が県庁に着くと、赤十字飛行隊の制服を身にまとった熊本支隊長、新永隆一(53)が待ち受けていた。「すぐに熊本空港に働き掛けてもらえませんか」

その意を酌んだ内田は緊急フライトに向けて、県災害対策本部の了解を取り付け、「物資輸送は公的活動であり、県からの要請である」と空港事務所に連絡。新永は現地へ急いだ。

午前10時すぎ。飛行隊の熊本空港への着陸許可が下りた。しかし、東海大阿蘇キャンパスまで物資を運ぶにはもう一つ、クリアすべき壁があった。

航空法は、空港以外に着陸する際、現地調査などを経て国土交通相の許可を得なければならないと定めている。今回も、場所の広さや障害物の

有無が分かる図面や写真などを付けた書類を用意する必要があった。こうした手続きには数日かかる。しかも非常時の南阿蘇村で、現地確認は不可能。新永には「無理難題」に思えた。

「阿蘇キャンパスにいる隊員の話では、十分な広さがあり、離着陸の安全性も問題ない」。空港管理者に対して新永は、活動実績も踏まえて何度も説明したが、法の壁は厚かった。特例として認められるには、飛行隊の認知度も低かった。

そのころ、支援物資を満載した長野支隊のヘリコプターと岡山支隊の軽飛行機は、既に岡山市の岡南飛行場を離陸していた。熊本まで約2時間。刻一刻と時は過ぎていた。

「こうなればイチかバチかだ」新永は石井啓一国交相とパイプを持つ県関係者、江田康幸(60)に電話を入れ、事情を訴えた。非常手段ともいえる行動だったが、成果はあった。「物資輸送には万全の安全を期してほしい」。約2時間という異例の早さで許可が下りた。

「民間団体が無数にある中、危険を伴う大災害発生直後の民間の活動



岡山支隊の軽飛行機から、救援物資の水やバナナの積み降ろし作業をする隊員＝4月17日午後(赤十字飛行隊熊本支隊提供)

をどこまで認めるか、判断は難しい。赤十字飛行隊が認められたのは、県と結んでいた災害協定も大きかった」。県交通政策課の内田は指摘する。

午後1時ごろ。待ち望んだ機が相次いで熊本空港に現れた。管制機能が制限され、強風下での目視の着陸だったが、ベテランパイロットの寺岡伸二(48)と白澤政仁(57)はスムーズに機体を降ろした。

それから約1時間後、新永も同乗したヘリが南阿蘇村へ飛び立った。阿蘇キャンパスにいる仲間の支援要請から、24時間が過ぎようとしていた。(浪床敬子)

＝文中敬称略

任務完了「経験しなければ分からない」

赤十字飛行隊編⑨

熊本地震

9

あの時 何が

2016.11.2

「これからそちらに向かう。受け入れ態勢を整えておいてくれ」

4月17日午後。いよいよ熊本空港を飛び立つ間際、赤十字飛行隊熊本支隊長の新永隆一(53)は、南阿蘇村の東海大阿蘇キャンパスで待つ隊員の本之内均(55)に連絡した。

それから十数分後、キャンパスの西の空にヘリコプターが現れた。「よく来てくれた。本当に助かった」。木之内は新永の手を固く握りしめ、長野支隊の白澤政仁(57)らに深々と頭を下げた。

ヘリはキャンパスと熊本空港を3往復し、岡山市で用意した水460リットル、バナナ100キ、パン5000個を届け切った。午後4時すぎ、新永は県担当者へ任務完了を報告。熊本地震が起こった14日から不眠不休だったが、そのまま炊き出しや給水など、地上での被災者支援に入った。

飛行隊はボランティア組織であり、隊員には仕事も生活もある。それでも、被災地のSOSは見過ごせない。

岡山から軽飛行機で駆けつけた寺岡伸二(48)は「いつ逆の立場になるか分からない。緊急時は支援が最優先です」。ヘリを操った白澤も連携の大切さを強調する。「東日本大震災でもそうだったが、物資輸送は現地の受け手と連携がとれないと難しい。今回は本之内さんや新永さんがいて、役所との調整や情報提供、地上での指示があったからこそ、やり遂げられた」

その後、阿蘇キャンパスにはようやく物資や支援の手が届き始めた。約千人が押し寄せた体育館が避難所となったのは4月19日まで。大半の学生が県内外の実家などに戻り、住民は地元で旧長陽西部小へ避難した。「住民と学生のつながりの強さ、支援のありがたさを痛感した」。農学部長の荒木朋洋(61)は、多くの力と共に乗り越えた緊迫の日々を振り返る。そして新永も、災害支援の大切さ



東海大阿蘇キャンパスに到着したヘリコプターから、支援物資を下ろす赤十字飛行隊の隊員や学生ら＝4月17日、南阿蘇村

を改めてかみしめている。入隊間もないころ、阪神大震災の被災地へ救援物資を運んだ。お礼の手紙や電話が次々に届くと、活動を続けようと強く思った。あれから21年。地元が被災地になり、「経験しなければ分からないことがある」と感じた。

「たぐさんの災害ボランティアがあるが、民間の活動がうまく機能するにはまだまだ壁が多い。さまざまな団体の情報を広く共有し、行政との連携をスムーズにすることが、災害時の効果的な活動につながるはずだ」(毛利聖一、浪床敬子)

＝文中敬称略
※赤十字飛行隊編は終了。次は「グランメッセ熊本編」です。

東病院へ炊き出し

おにぎり・漬け物 400 個、バナナ 50kg、水 200 ℓ、200 食分の豚汁



九 建

◇給水活動と避難所へ苺提供

水 3000 ℓ 3 日間熊本市内中心部で配給、熊本市竜南中学避難所へ苺 16 箱提供



GROUNDチームで協力していただいた方々

- 九建
赤穂 孝毅 原田美由紀
大塚沙亜也 川口 風音

- 九建総合開発
下田健一郎 満田 俊之
坂口 晃 清田圭志郎
西本 裕美 村上 広樹
竹中 義富 田畑 祐一
井美 希寛 中谷 尚希
安徳誠史朗 坂本 魁
松尾 孝文 有働 豊
松山 悌士 村上 貴信
樫原 卓

- 九建運送
清田 哲夫 西村 貴博

- 未来樹
川端 剛

- 東病院へ炊き出しに協力
内古閑陽子 高木るり子
島貫三津子 橋積真理子
轟^{つるもと}本 晃子 奥田 直辰
奥田 福美 奥田 野乃
奥田 佳乃 角田 慶子
森永 光輝 田尻 智美
本田奈三江 本田翔太郎
本田雄太郎 松田イツ代
山下 孝 安達美佐子
深迫 清美 中山^{こわし} 毅
中山 昭代 新永 恵美
大石 敬子 中野 博行
中野 幸穂 中野 椋啓
中野 玲奈 山田 唯花
山田^{あかり} 明花 山田^{ひかり} 光花

未来樹

◇日赤車両へ軽油 204 ℓ 燃料提供



九建総合開発

◇被災地への道案内と物資搬送

九建運送

◇被災地への道案内





赤十字飛行隊協力支隊リスト

◆**和歌山支隊(副隊長)** 各支隊への出動要請と調整

田井 秀治

◆**長野支隊** ヘリによる空撮(阿蘇) 救援物資調達、搬送(水、バナナ、パン)

白澤 政仁 寺本 弘昭

◆**大阪支隊** ヘリによる空撮(益城、御船方面)

並河 勝典

◆**岡山支隊** ビジネスジェット機による救援物資調達・搬送(水、バナナ、パン)

寺岡 伸二 平野 清治 田村 繁好 保坂 淳一

◆**鹿児島支隊** ヘリによる空撮(益城、高森、阿蘇)

剥岩 政次

◆**熊本支隊**

東 謙一	新永 隆一	三好 恒紀	原田 茂
木ノ内 均	管 聖	松村 徹	